

# 関 聲



## ◎復刻の辞

『どきのこえ』は、一八九五(明治二八)年一月、日本救世軍の機関紙として創刊された。

当初の紙名は、『関聲』、四六号から以後は、戦時下の一時を除いて、戦後にいたるまで『どきのこえ』として刊行され続け、現在も『どきのこえ』として刊行されている。

ロンドンの救世軍本部から十数名の士官が来日し、日本での活動を始めたのは、創刊に先立つ同年九月のことであるが、その後の日本救世軍の歩みは、そのまま日本の社会福祉の歩みであるといえる。

あまりにも名高い娼妓自由廃業運動とその救済活動、生活困窮者・無宿者・刑余者対策、結核

山室軍平 ほか編。娼妓救済、生活困窮者対策、災害地救援…  
日本の社会福祉の原点を示す救世軍機関紙、完全復刻！  
社会事業史・女性史・近現代史研究に必須の重要文献

療養所創設、災害救済…等々その業績は、日本近代の社会問題、人権問題及び社会福祉の歴史を語るのに不可欠である。

とくに一九〇〇(明治三三)年『どきのこえ』第一一二号の「醜業婦救済号」をはじめとする娼妓への自由廃業の呼びかけは、自由廃業運動を強く推進し、そしてその際、救世軍のひとびとが文字通り生命を賭けて救済に尽力したことは特筆すべきであろう。

本紙には『平民の福音』を著わして、平易な言葉で大衆に語りかけ、キリスト教に導いた救世軍の中心人物・山室軍平がその死の直前まで筆を執っているが、それを反映して本紙も、平明な文体と実践の記録が克明であることが特徴である。

弊社では、日本救世軍及び山室軍平御遺族の全



# どきのこえ

THE WAR CRY

全21巻・補巻1・別冊1 (明治28年→昭和23年) 不二出版

面的なご協力を得て、創刊から一九四八(昭和二三)年までの全号を復刻する。本復刻版には、研究者の間でも幻であった戦時下の改題紙『日本救世新聞』朝のひかりも補巻として含めた。幾多の妨害や弾圧にたじろぐことなく、キリスト者の良心を实践した救世軍の歴史に、社会福祉事業の原点をみることが出来る。

物質的豊富の中の退廃と貧困の状況にある私達の現在を考えるうえでも本紙は十分示唆的であるといえよう。

日本社会事業史・女性史研究のみならず、日本キリスト教史・人権運動史研究に必須の資料であると信じ、世に送るものである。

不二出版



# 山室軍平、そして『ときのこゑ』

杉井 六郎

明治二四年(一八九一)九月、新島襄の没後一年八ヶ月に、同志社生徒石塚正治によって編纂発行された『新島先生言行録』(大阪福音社)は山室軍平の回想によると、新島の没後、十余回におよぶ新島の追憶談を聞く会合で、山室が自ら筆記してもつていた逸話、逸聞の記録を石塚に提供して出来上ったことが伝えられている。また、山室は同志社在学中、新島から直接言葉をかけられる機会がなかったが、先輩の吉田清太郎から伝えられた新島の励ましの言葉を終生の「箴言」として、これを新島の没後五十年を記念して出版された『新島先生記念集』にしている。山室はその年、昭和一五年(一九四〇)三月、六八歳で永眠した。

戦後、山室家から同志社が寄託をうけた山室軍平史料は、いうまでもなく救世軍とその社会事業の記録ならびに彼の著作活動の原稿類などである。『ときのこゑ』はもちろん、その中の大きな部分を占めるものであった。現在、同志社大学人文科学研究所で進められている山室軍平研究はこの記録・史料によって行われている。ところで、この『ときのこゑ』は、およそ他の所蔵に比較すれば、すぐれて揃っているものであるが、なお明治三〇年代の前半に約一〇〇号の欠号をはじめとして、また後の年代にも若干の欠号があるという状況であった。

この度の不二出版の復刻の企画を見ると、これらの欠号がすべて博搜されて補綴せられることになった。日本救世軍の活動、山室軍平の足跡をあとづけて行く上でこのことの意味はきわめて大きい。しかも注目すべきことは、戦時下、その紙名の変遷して『日本救世新聞』、さらに『朝のひかり』として昭和一五年九月一日(一〇六六号)から一七年九月一日(一一一五号)にいたる間、発行された部分が補巻として収載されることである。なお、復刻は戦後の「復刊」にまでおよんでいる。

『廓清』、『人道』について今回の『ときのこゑ』の復刻は、斯学の進展の大きな発条であり、まことに慶賀にたえない。

## 『ときのこゑ』記者としての父のいと

山室 徳子

父山室軍平が渡来間もない救世軍に身を投じたのは二三歳、明治二八年のこと、初の日本人士官として伝道所を開くと共に、自ら進んで機関紙『聞聲』を担当、主筆兼唯一人の記者となりました。同志社の苦学生時代から「労働者間一伝道者トナリ、雑誌ヲモ発兌シ、千弊万害ノ世ヲ革新スル事」を夢想した彼にとって、『ときのこゑ』は絶好の舞台でした。魂の糧と肉体のパンを民衆に頒つ戦士として、平易な言文一致を用いて平民の福音を説き、社会正義を識者に訴え、翻訳を手がけ、軍歌をつくり、さしえには露店で求めた木版画にそえ日常の生活訓を絵解きするなど、創業期の彼一流の苦心のあとを全面に見ることが出来ます。

「ペンは天の使いともなり、悪魔の使いともなる。祈って書け」とは日頃からの父のこどもたちへの言葉でしたが、小さな一枚の『ときのこゑ』が、各地各層の同信・同志を招き寄せ、社会の理解と同情の波を拡げる力となった事実を裏づけられた信条であったと思えます。千里と号し、東奔西走の父が片時も手離さなかつた箱型のブリーフ・ケースには新旧約聖書、原稿用紙、太い万年筆、赤鉛筆、こより等がいつもきちんと納められていました。会う人びと、見聞するすべてを戦の資としていた父は車中に船上に、会堂の一隅に鞆を台とし、寸暇を惜んで筆を走らせ、月二回ずつ、実に四五年間死の直前まで、『ときのこゑ』の執筆をつづけました。

書架に遺されたときのこゑ合本が、戦時の弾圧と空襲にも守られたのは群馬県原市の半田善四郎氏のご厚意の保管によるものです。この度の復刻の実現を感謝すると共に、ひとむれの日本人キリスト者の献身と愛のたたかいの記録がなお今日に生かされることを願ってやみません。

クレスト (救世軍軍章)



いちばんがせ・やすこ  
日本女子大学教授

すぎい・むつろう  
同志社大学人文科学研究所教授

あさの・ひろし  
救世軍司令官

やまむろ・とくこ  
『婦人之友』編集部

たかはし・きくえ  
日本キリスト教婦人矯風会

## 先駆的かつ根元的な実践の轍を辿る

一番ヶ瀬康子

日本の社会事業史のなかで、日本救世軍の歩みは、大きな意味をもっている。日本救世軍の社会的活動はたんに先駆的であるばかりでなく、きわめて根元的なところからの実践であったからである。その歩みを知ることのできる第一級の史料ともいえるべき、『ときのこゑ』が、今日復刻されたことは、日本社会事業史はもとより、日本キリスト教史さらに人権運動史等を学ぶ者にとって、まことに朗報であるといえる。これによって、よりいっそう研究を豊かに、しかも深めることが可能になるからである。

しかしそれだけではない。日本救世軍の活動と思想そのもののなかには、いまの経済大国日本の頹廢と腐敗をどのように乗り越えていくかということを考えるとき、多くの示唆がある。今回の復刻がたんに専門家に読まれるばかりではなく、日本人の思想形成そのものを考えるものにとつて、さらに自らの人生の在り方の模索をつづけている人にとつて、十分に活用されることを望んでやまない。

山室軍平をはじめ、身をもって日本の暗黒にとりくんだ人々の生きざま、歩みまたその想いこそ、私どもに心のエネルギーと勇気を与えてくれると思うからである。山室軍平自ら、『ときのこゑ』は「あく迄平易通読を旨とし、どこ迄も一般民衆の読物たらんことを心がけて居る」(山室軍平選集Ⅳ 一四七頁)とのべている。それだけに、読みやすさもあるからである。

## 社会福祉事業の原点をみる

朝野 洋

この度、不二出版から救世軍の公報『ときのこゑ』復刻版の出版がなされることを感謝するとともに刊行される日を持ち望むものである。『ときのこゑ』THE WAR CRYは救世軍万国本営においては英語版で、その他各国の言葉で発行されている。日本の救世軍は明治二八年九月にその働きを開始し、早くもその年の一月に『聞聲』創刊号を発行した。創刊号より数号は長坂毅氏の編集によるもので、同氏は在ロンドン万国士官学校に学び、帰国後『ときのこゑ』発刊に尽力した。以来九一年、戦時中は『日本救世新聞』朝のひかりと改名したが、再建した救世軍は『ときのこゑ』を復刊、今日二〇〇〇号を突破するに至った。

山室軍平はその初期からこの編集にたずさわり、昭和一五年、召天するまでほとんど毎号執筆しており、ことにその第一面には彼独特の文章をもって伝道メッセージを掲載した。その他、日本における社会福祉の原点ともいえるべき社会福祉事業、例えば婦人救済運動、生活困窮者・無宿者及び刑余者対策、結核療養所創設等が記録され、またキリストによる回心談、更生談が初期には挿し絵入りで印刷されており興味深い。これは救世軍の歴史であるだけでなく、日本におけるキリスト教の大衆伝道及び社会福祉事業の開始の記録でもあり、宗教及び社会福祉事業に関心を持つ人々には貴重な資料となるであろう。

全国の図書館、学校、宗教団体、社会福祉事業関係の団体及び研究者に推薦する次第である。

## 廃娼運動の貴重な資料

高橋喜久江

救世軍の『ときのこゑ』が不二出版の手により復刻されるはこびになつたことは、ご同慶のいたりです。婦人矯風会が発足したのが一八八六年二月六日、本年で一〇〇周年を迎えました。日本救世軍の設立は一八九五年、キリスト者としてともに相携えて廃娼運動をなさしてきました。

婦人矯風会の機関誌は、『東京婦人矯風雑誌』にはじまり現在の『婦人新報』にいたりますが、復刻出版(一九八五―八六年、不二出版刊)によつて、全国の研究者への便宜がはかられました。いままでも閲覧による原本の破損を心配した立場のものとして安心させられました。同じなやみが救世軍にもおありになつたことを思い、復刻版の刊行は自他ともに喜ばしいこととあります。

貴重な廃娼運動の資料が『ときのこゑ』には盛り込まれていますが、いままでも初期の『ときのこゑ』は門外に出されず、未踏査の状態にあつたことでしょうか。復刻版の刊行は、廃娼運動を歴史的な研究対象とするひとには、一大恩恵ではないでしょうか。婦人新報復刻の体験では、私たちの想像をこえた多くの利用者があつたことから(たとえばスタンフォード大学などが購入)、『ときのこゑ』刊行を心からおよろこびするものです。



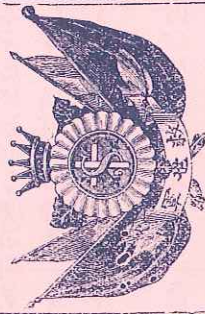
(NATIONAL HEADQUARTERS) TOKYO, JAPAN.

COLONEL BULLARD.

入るに天に先より善偽は妓媚(INTERNATIONAL HEADQUARTERS) LONDON, ENGLAND.

GENERAL BOOTH.

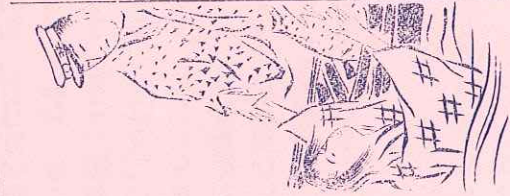
(一)



# 七転八起

報公本日軍世救

閣聲 第五十二號



## 女郎衆に寄文

口から出せの道徳論は、いやと云ふ程聞かぬ。いふならうが、眞實な女の方の爲を思ふて、相識相手になつて呉れる人は一人もない。氣の毒なる御身の上を思ふにつけ、どうしても黙つて居られませぬから、一筆書いてあなた方に差し上げるわけであり、升、たどひ九尺二間の裏柳で、なごんだまを回め、燐すの箱を張り、又は田舎で日に燻けて眞黒になりながら田の草をとり、肥たむを搦いで働く共、若し正直律義な家業をして、亭主見供一緒に暮らして居るとなら、誰に遠慮もなく、貧乏中にも樂み云ふものがあります。今日あなた方の様にかごの中の爲同然、狭い扉の内に閉こめられて、よしや幾らか奇麗な装物を其身につけて居るにもせよ、夜更にそまぬ人々の機織りづまを取り、親不孝者、不忠義もの、酒のみ、虚言者、泥棒など世間で、種々しい人間に、かはるゝ其からだを玩具にせられ、折々は悪い病氣をうけ、お驚者にいやな検査をされ、からだは衰へ、心は苦しく其のみならず借金は日に増し、何時自由の身になれるとやら、其當道と云ふものはありません。たま／＼切離れの好客に有付たと思へば、早やもう直ぐに其客が自分故、親から勘當を受けた、夫婦別れをしたの、又は主人の金を盗んで逃轉したと云ふとを聞く始末。大凡女郎と云ふ商賈は、苦しくて、悲しくて、耻かしく又罪の深い仕事人間の世界に今一つ／＼入りませうか。あなた方は何時迄も此んな仕事を好む事の様に考へて居てはならぬ、是非速かに此の道ならぬ世渡りを止め、決心をせねばなりません。然しなら何うして此職業を止めるとか出来るかと申すに、有難いとは明治の御世の御法律では、よしあなた方に何れ程の借金があるにもせよ、活た人間を事責にとつて、無理につらに勤めるとは

出来ぬと云ふとが、ちやんと明白に定まつて居ります。故、あなた方が唯是非共此此らしい仕事を止ると云ふ覚悟を定め、悔業固と云ふものを其筋へ差出しさへすれば、借金の有無に拘らず、あなた方は直ぐに女郎を止めるとか出来る様になつて居ます。勿論女郎屋の亭主はあなた方に仕事を止めさせるとを好まぬ故、何とか色々故障を入れ、又は若い衆などを頼んで邪魔をさせるかも知れませぬが、唯道理は右申す通り明かでありませぬ。根氣好く辛抱してどこ／＼迄も推通して行きますならば、つまりあなた方は自由の身になれる筈なので、此事に付ては先達中、名古屋あたりで段々裁断沙汰などもありましたが、何時でも女郎衆の申分が通つて親方の方が負になつて居ます。抑あなた方がい／＼浮氣家業を止めなすれば何うかと申すに、勿論これまでの様にしたらなく、身を持つて居る様などでは、忽ち食ふに困つて復もや腹味女商賈でも始めねばならぬ様な心配がある故、あなた方は此際非常な奮發をして、何でも地味で律義な家業を覺え、堅氣な様人になつて身を堅めるとを心がけねばなりません。其れには東京芝区芝口二丁目救世軍の本營と云ふ所があつて、其處一顧れば色々あなた方の相談相手になつて呉れ、又随分後々の世話をして呉れるとになつて居り升。此救世軍は世界中何處の國でもあなた方の様な不幸な婦人を救ふ爲に、非常に骨を折つて居る仲間ですから、安心してお願ひなさるか好む事であり升。必竟あなた方も私共共、も天の眞の神様の前には、兄弟の様なものですから、今日あなた方の氣の毒なる身の上を見に忍びず、まごころを書き留めてあなた方に知らせ申すわけ故、とくと考へて身の察着を定めなされたが宜しうござります。

**傾城に請なきか**  
傾城に誠なしと云ふとがある、誠がないわけではなけれど、若し誠、眞實を盡した段には、女則、語婦など云ふ罪深い家業は勤まらなくなるから、唯もう虚言、偽り、許りで毎日を送つて居る次第であります。高尾と云ふ名高い女郎の句に  
書初めや耻か作らうと知り  
と云ふとがある。之によつても女郎衆の胸の中にも眞實と云ふものはあり、唯其罪深い仕事を爲す爲

に、強て其眞實を抑へて、罪を作つて居るとが分り升。然るに此眞實即ち良心と云ふものは、元來天の神様が人間箇々の胸の中に置かれた、取違ひの縁なもの故、之に違ふとが度々重なれば、忽ち神様の御立に遇ひ、現世に於ても、来世に於ても恐ろしい天罰を受けねばなりません。昔様よ来た然う云ふ恐ろしい日の來ない間に、速かに悔改めて耶穌基督と云ふ教主に頼り、清く正しい一生を送る者となりなされ。

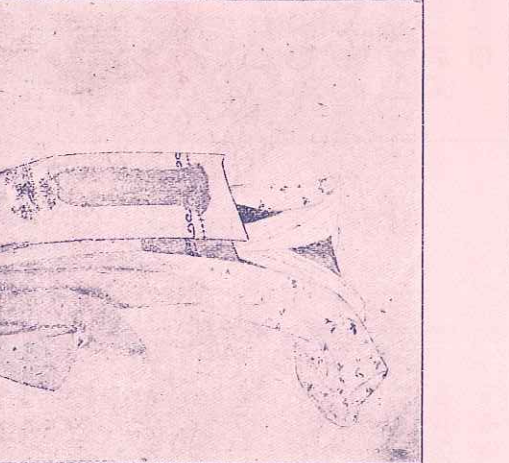
**祇王祇女の話**  
昔し京都に祇王、祇女と云ふ姉妹の白拍子がありました。時の大巨平の清盛公の御目に此り、召入られて非常な御寵愛を受けて居ますと、其の頃今一人佛御前と云ふ舞姫が出で参り、一度清盛公の前に出て舞を致してからは、清盛公の心が其の方に移つて終ひ、最早一向祇王の方へは見向きもされなくなり、祇王に於てはつく／＼と身の上の果敢いとを嘆き、其母及び妹と一緒に嘆野と云ふ所へ通つて行き、頭を丸めて尼になつて終ひま



したが、其時祇王の年が漸く二十一、祇女が十九其母親が四十五才であつたと云ふ。祇王が御殿を逃げ出す前に、部屋に置かれた歌に  
崩出るも枯るも同じ野邊の草  
いづれか秋に遇て果つべき  
佛御前も祇王、祇女の志しに感じ、夜其庵を訪れて参り、一語に尼になつたと申し升。何んぞ哀れな物語では入りませぬか。  
此の如く顔付の奇麗なとや、遊藝などで、一時人からチャヤヤ言はれましても、變り身のはらう云ふ色香を誇る輕薄者の常で、徒是する間には自分にも其傾に誠が寄り、齒が腰け、腰が曲つて誰も見向て呉れぬ時が参り升。昔しの歌に又  
戀する身と空飛ぶ鳥は  
どこのいつくで飛るやら  
果敢ないものは色香を街ふ婦人の身の上で、頼み甲斐のない者は道義者の心中であり升。其故に運ぬく日本國中十萬人の藝者女郎衆に御忠告申す。速かに然る薄情な男に頼るとを止めて、天の眞の

神様に頼り、浮氣な商賈を止めて、地味で堅氣な世渡りする心になりなされませ。

**文盲者の聖書**  
或る時熱心なる基督の信者で、いろ／＼の字も知らない男が、何時も薄い書物を懐に入れて居り、折々出しては之を見て居ります。其知人が不思議に思ひ、一冊彼の男は字も知らないに、何を讀んで居るとか、一日其本を懐から取つて見ますと、始の一枚は眞黒な紙で、其次は赤、其次は白と、都合三枚の色紙を繰り合せたもので、唯一字も文字が書けないから、益々其意を解し兼ね、問質しますと答へて、是は私しの大事な聖書であり升。始めの眞黒い紙は人間の罪に喩へ、次の赤い紙は基督の鮮血に喩へ、終ひの白い紙は基督の救を受け心は深く、新しくせられたる喩へであり升。私しは毎日之を繰返して見て、如何に自分の心は今日も、基督に救はれて清くなつて居るか、否かと氣をつけ乍ら毎日を送つて居る次第であると申しました。此の如く人は眞眞の神様



の前に罪を重ね、其心が悪く汚れて居るものであり升。然り乍ら神様の御子耶穌基督は、私共の代身となつて十字架にかゝつて下されました故、私共が唯既任の罪科を悔改め、眞心かから此耶穌基督の血しに頼りさへすれば、既任の罪を赦さるゝのみならず、更生つて新しい人間になり、雪よりも白い心が有て升。此の眞の心、赤い血で白くせられると云ふのが即ち、救世軍で年中説いて居る救世の道であり升。

**聖書の教訓**  
「爾いかに意や或二人の子ありしが兄に來りて曰けるは予よ今日我が爾國に往て御け、答へて否と曰しが後悔て往たり、又弟にも爾の如く曰けるに答へて予よ我往べしと曰しが遂に往ざりき、此二人の者孰れか父の旨に違ひし。彼等偽善者曰けるは兄なり。耶穌彼等に曰けるは誠に爾曹に告ん、彼更及び爾等は爾曹より先に神の國に入るべし、去れ約翰義しき道を以て來りしに爾曹之を信せず、爾等爾等は之を信じたり、爾曹之を見て尙悔改めず彼を信せざりき(馬太傳廿一)

**天使の聲**  
○是は天の使が美しい遊女に何か耳語て居る圖であり升。潔い天の使のことで、其言とも自かから頼問や道義君子の清氣沙汰と眞心、屹度身に染みて眞面目な話に相違ひませぬ。抑々天の使は今何う云ふとを此遊女に耳語て居りますか。  
○天の使は先づ此遊女の器量自覺を戒めて居ります。はねかくす皮には誰も迷ひけり、美人といふも皮のわざなり。よし深山に浮氣者がお前の周圍に、お世辭を言つて集つても、其はお前を大事にするのではなく、お前の顔の皮一枚を愛しがるのである。而して其美しい顔の皮は五年と十年の間には變つて終ひ、最早其處に居るかとも、言ふて呉れる人の無くなることを知らないか。骸骨の上を装束とて花見かな。今日降りお前は然つたらぬ器量自覺を止めねばなりません。

○天の使は次に此遊女の巧みに客を誘ふ、手練手管を戒めて居ります。全盛とは何か、手練手管とは何か。傾城の源で倉の屋敷が有り。心にもないとを言つて一人でも多くの人を誘はせ、家倉身代をつぶさせ、親兄弟妻子に難儀をさせる様な手引をする。お前の力量口世の中に迷ひ惑を惹起す悪い力量で、其智慧は悪魔に忠義を盡す悪智慧と云ふものである。然しなものを自覺するよりは、先づ自分の作り置く罪科の深いとを感いたが可いぞ。

○天の使は又遊女と云ふ仕事の不都合などを教へて居り升。子守歌を歌ふて赤兒の守をしよう、又はすくまふれになつて邊所の仕事をしよう、其は正しい仕事だから聊さかも恥かしい所がないのみならず、却つて働るべき所がある、併し作ら貴い人間が其身を苦し、機を買つて毎日を送ると云ふは、神様の思召に合はぬとである、人間のすべきとでない。等々物が食はれないで死んでも、遊女と云ふ様な仕事は磨つて終つたが宜しい。

○天の使は更に此遊女の改心の法を教へて居り升。「救世軍に行け救世軍といふものは世界各國で數多の女郎御婦の類を救ふて居る團體だから、行て其身の上を相談し、其言を、儘に聴き、働き、今から全然以前に暮る堅氣な世渡を致せ。

○天の使は最後に神信心の大事を諭して居り升。勿論長い問答氣家業をした者には、急に眞面目な世渡りはし難いものである。併し其も救世軍で教へる眞の神様を信仰し、基督様に頼つて罪から救つて貰ひ、更生つた人間になつて、以來は樂んで居るべき世渡りが出来る様になる。是は不思議な神様の御恩である故速かに依頼せねばなりません。

○此國を讀んで此う云ふ天の使の聲が其胸の裡に聞へる婦人達は、速かに決心して其不義なる商賈を磨り、眞人間の途に御立歸りなされませ。



関連年表

- 1865年 ウィリアム・ブース、ロンドンにて(慶応元)救世軍の活動を始める。
- 1872年 マリア・ルーズ号事件
- (明治5) 政府、娼妓解放令布告
- 1886年 東京婦人矯風会発足
- 1888年 矯風会機関誌『東京婦人矯風雑誌』(のちの『婦人新報』)発刊
- 1889年 群馬県会、廃娼案可決。
- 1894年 日清戦争はじまる。
- 1895年 救世軍のライト大佐ら十数人來日、日本での活動を始める。
- 機関紙『<sup>とまごのこえ</sup>聞声』創刊(第46号より『とまごのこえ』に改題)
- 山室軍平、入隊。
- 1899年 山室軍平、『平民の福音』刊行
- 宣教師・ユリシース・グラント・モルフイ、娼妓自由廃業の道を拓く。
- 1900年 『<sup>とまごのこえ</sup>聞声』救済号を発行
- 自由廃業運動がさかんとなる。
- 内務省、娼妓取締規則を發布。娼妓の自由廃業が法制上明示される。
- 救世軍婦人救済所、開所。山室機恵子、初代主任となる。
- 1905年 『人道』創刊
- 1907年 ウィリアム・ブース、來日。
- 1911年 吉原遊廓全焼。廓清会結成。『廓清』創刊。月島労働寄宿舎、落成。
- 1912年 救世軍病院設立。ウィリアム・ブース、死去。
- 1913年 東北地方大凶作。凶作地子女救護活動を行なう。
- 1914年 伊藤富士雄大尉、洲崎遊廓の二娼妓自由廃業に同行中、楼主に襲撃され、重傷を負う。
- 1915年 吉原遊廓の花魁道中、禁止となる。
- 1917年 『<sup>とまごのこえ</sup>聞声』禁酒号発行。
- 1921年 救世軍社会鍋の街頭募金活動はじまる。
- 1923年 関東大震災。被災者の慰問救護に尽力する。
- 1925年 児童虐待防止運動を開始。
- 治安維持法・普通選挙法可決
- 1926年 矯風会・廓清会合同の廃娼連盟成立。
- 1937年 日中戦争勃発
- 1939年 第二次世界大戦勃発
- 1940年 山室軍平死去。
- 1941年 『<sup>とまごのこえ</sup>』、『日本救世新聞』に改題。『平民の福音』発行停止される
- 『日本救世新聞』、『朝のひかり』に改題。
- 1942年 太平洋戦争勃発
- 『朝のひかり』廃刊。『新生命』に統合される。
- 1945年 敗戦
- 1946年 『<sup>とまごのこえ</sup>』復刊。
- 1958年 売春防止法施行される。



ユリシース・グラント、モルフイ

右から平ブラード、大佐・山室軍平、少佐・デューリス少佐(明治39年)

『聞声(とまごのこえ)』創刊号(明治28年11月)



婦人救済所(前列右から3番目、山室機恵子)



吉原遊廓で廢娼運動のため野戦をしなごに備した救世軍(明治33年8月)



関東大震災後廢娼運動(大正12年)



ウィリアム・ブース來日を歓迎する会(於、市会議事堂)前列左から、島田三郎、その後ろ山室軍平、尾崎行雄、ひとりおいて大隈重信、(明治40年)

石つぶての中で  
モルフイの廢娼運動

U・G・モルフイ著  
小川京子 訳・解説

明治30年代、愛知県で娼妓自由廃業運動に挺身したアメリカ人宣教師モルフイの著「日本の社会悪とそれに関係する諸問題」を第二部、彼の生きたちや運動の意義を紹介した解説を第一部に収録。  
□四六判・並製・254ページ  
□定価 1,500円(〒250円)

紅燈下の彼女の生活  
日本廢娼運動史

復刻版 伊藤秀吉 著

廓清会の中心的人物・伊藤秀吉が著した本書は、当時の廢娼運動の根拠と目標、そしてその状況を詳しく伝えたものとして、廢娼運動研究に必須の文献である。  
□一九三一(昭和六年)刊  
□四六判・上製・639ページ/568ページ  
□挿定価 15,000円

人道

復刻版・全16巻

留岡幸助の経営する「家庭学校」の機関誌として発刊された本誌は、当時の社会に対する慈善事業の啓発の必要と、欧米各国の思想・事業の状態を紹介、啓蒙することを目的とした社会事業専門誌である。近代日本の社会事業史研究に不可欠の資料である。  
□一九〇五(明治三八年)年―一九四四(昭和一九)年  
□B5判・上製・総5,500ページ  
□別冊―解説(山本幸規)・総目次  
(これのみ分売可・定価8,000円)  
□付録―家庭学校回顧十年、ほか1  
□挿定価 260,000円

廓清

復刻版・全35巻

明治四四年の吉原遊廓の大火を契機に結成され、以後三〇年間底辺女性の救済を訴え続けた廢娼運動体―廓清会の機関誌。廢娼論、遊廓の実態報告、運動の経過報告、資料統計等を随時掲載して廢娼運動の宝庫となっている。  
□一九一一(明治四四年)年―一九四五(昭和二〇)年  
□B5判・上製・総一七,000ページ  
□別冊―解説(竹村民郎)・総目次・索引  
(これのみ分売可・定価4,000円)  
□挿定価 300,000円

婦人新報

復刻版・全60巻

女権運動の先駆である婦人矯風会の機関誌である本誌は、公娼制度にたちむかい、婦人参政権運動に尽力した矯風会の活動を克明に記録したものであり、女性史研究、近代史研究、キリスト教史研究に必須の資料である。  
□一八八八(明治二一年)―一九五八(昭和三三)年  
□菊判・上製・総30,000ページ  
□別冊―解説(五味百合子)・総目次・索引  
(これのみ分売可・定価18,000円)  
□挿定価 600,000円

関連書籍(案内)





復刻版『ときのこと』刊行概要

概要	1895(明治28)年11月→1948(昭和23)年12月 全21巻・補巻1・別冊1 A3判・B4判・A4判/上製/総9,070ページ
補巻	改題紙『日本救世新聞』『朝のひかり』+「のど書」
別冊	解説(室田保夫)・総目次・執筆者索引(全2巻)
推薦	朝野 洋 一番ヶ瀬康子 杉井六郎 高橋喜久江 山室徳子 (五十音順)
揃価	400,000円 (別冊のみ分売可=40,000円)

配本	巻数	発行年月/(号数) ※第1~45号の紙名は『聞聲』	判型	本体揃価
第1回	1~3巻	明治28年11月~明治38年3月(1~222号*)	A3	80,000円
第2回	4~9巻	明治38年4月~大正5年12月(223~504号)	B4	90,000円
第3回	10~15巻	大正6年1月~昭和3年12月(505~785号)	B4	90,000円
第4回	16~21巻 +補巻	昭和4年1月~昭和23年12月(786~1102号) ●補巻=昭和15年9月~昭和17年9月(1066~1115号)を収録	B4	100,000円
第5回	(別冊) 全2巻	『ときのこと』全1102号及び『日本救世新聞』『朝のひかり』全号の総目次・執筆者索引+解説、年表を収録	A4	40,000円

不二出版  
東京都文京区向丘一丁目二  
電話 〇三(八一)二四四三三  
FAX 〇三(八一)二四四六四  
振替 〇三(八一)二四四六四

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。